資料２　：　復興天守閣の根拠資料

■天守閣設計：藤岡通夫　東京工業大学教授工学博士（1908-1988）
昭和 32 年 10 月　設計依頼
昭和 34 年　1 月　設計案確定
設計監理：株式会社建築美術研究所
構造設計：服部正構造計画研究所
考証：中野敬次郎（1903-1987）［小田原市社会教育課長］

■基本資料
≪古写真≫
一重目の骨組みを残すのみの解体途中の古写真

≪模型≫…三重天守閣と五重天守閣の模型が存在
五重天守閣の模型…1 基
　(ア)旧大久保家蔵（縮尺　1／40）
三重天守閣の模型…3 基
　(イ)東京大学蔵（縮尺　1／20）
　(ウ)大久保神社蔵（縮尺　1／20）
　(エ)東京国立博物館蔵（縮尺　1／20）
　（※東京国立博物館蔵模型は大久保神社蔵模型と大きさも形式も同）

≪古図≫
五重天守閣…2 枚
　（ア）小田原藩作事方川部家に伝わる五重天守閣古図（縮尺　1／30、1／40）
三重天守閣…2 種類 3 枚
　（イ）小田原藩作事方川部家に伝わる三重天守閣古図 2 枚（縮尺　1／40）
　（ウ）小田原藩作事方川部家に伝わる三重天守閣古図 1 枚（縮尺　1／20）

■検討結果
　古写真、雛型模型などの資料を用い検討を重ねた結果、総体的な意匠構造は東大模型、平面規模は大久保神社模型、高さはその両者の中間とし、地下室及び 4 階には廻縁・高欄を設けることとした。

資料２－１

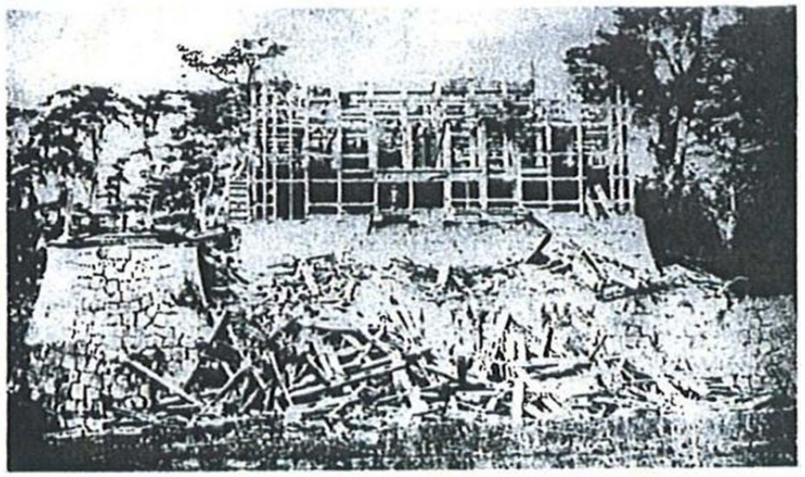
復興天守閣の根拠資料

■天守閣設計：藤岡通夫　東京工業大学教授工学博士（1908-1988）

①基本資料

≪古写真≫

・一重目の骨組みを残すのみの解体途中の古写真
（明治３年１月解体）
（絵葉書：維新時代の小田原城「半ば取毀されし天守閣」が残るが原版は不明）
（※上記の他、解体前の天守閣の姿を映す写真は無）



≪模型≫…三重天守閣と五重天守閣の模型が存在

五重天守閣の模型…1 基

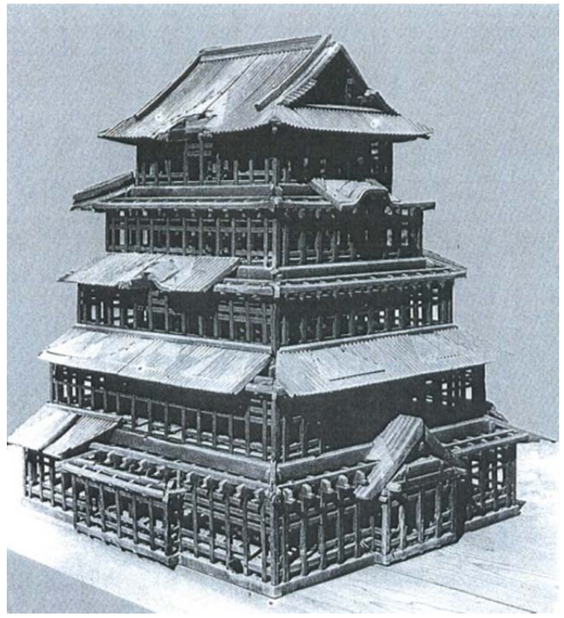
(ア) 旧大久保家蔵（縮尺　1／40）

三重天守閣の模型…3 基

(イ) 東京大学蔵（縮尺　1／20）

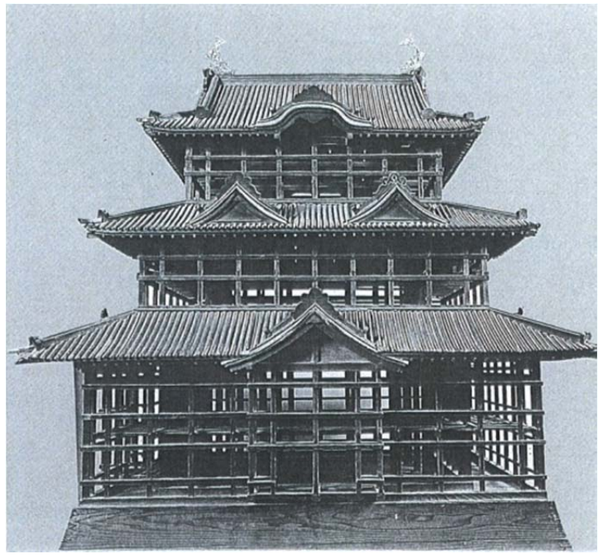
(ウ) 大久保神社蔵（縮尺　1／20）

(エ) 東京国立博物館蔵（縮尺　1／20）（※東京国立博物館蔵模型は大久保神社蔵模型と大きさも形式も同）



（ア）旧大久保家蔵（縮尺　1／40）

（イ）東京大学蔵（縮尺　1／20）



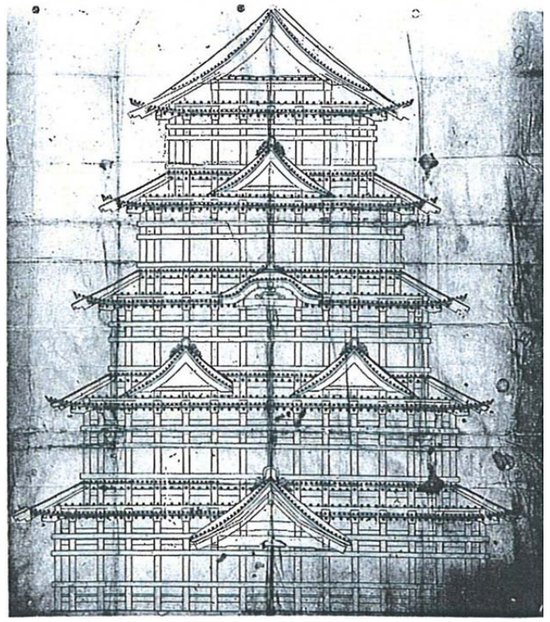
（ウ）大久保神社蔵（縮尺　1／20）

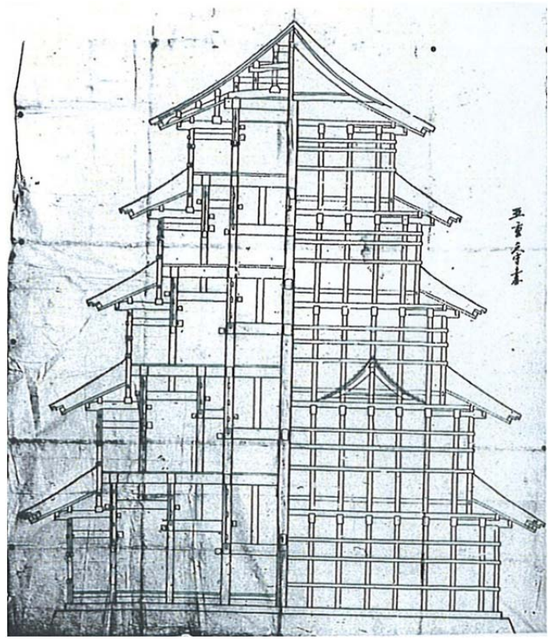
（エ）東京国立博物館蔵（縮尺　1／20）

≪古図≫

五重天守閣…2 枚

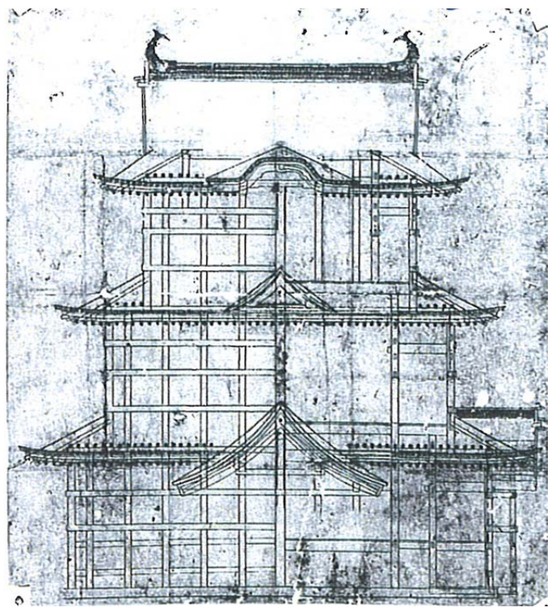
（ア）小田原藩作事方川部家に伝わる五重天守閣古図（縮尺　1／30、1／40）

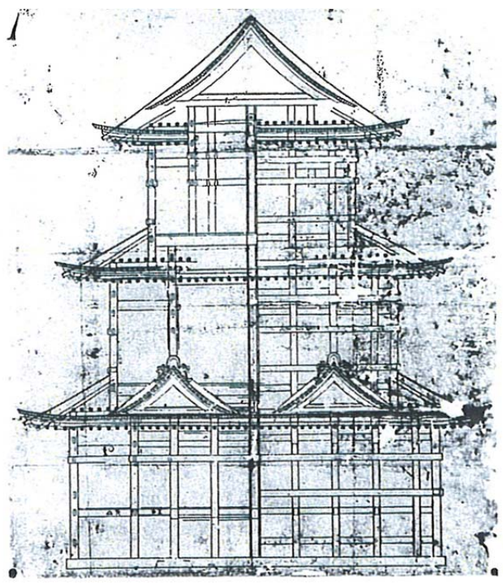




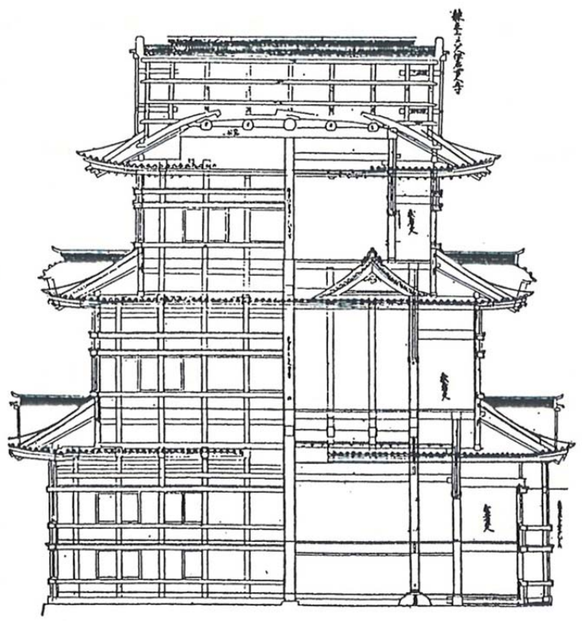
三重天守閣…2 種類 3 枚

（イ）小田原藩作事方川部家に伝わる三重天守閣古図 2 枚（縮尺　1／40）





（ウ）小田原藩作事方川部家に伝わる三重天守閣古図 1 枚（縮尺　1／20）



②検討の経過

≪検討方針≫

城絵図や文献のうち五重天守閣についての記録が確認できないことから、これらは実現しなかった計画案と判断し、主に三重天守閣についての資料（三重天守に関する木造模型 3 基、図面 2 種 3 枚）を基本に検討する。

≪検討結果≫

三重天守閣における資料を検討した結果、法量や破風の構成などの相違点が見られたため、唯一の古写真（明治 3 年解体）と比較を行った結果、東京大学蔵模型の一重目の構造が最も近く、また、建築様式も宝永の頃であるとされたため本模型を復興資料として位置付けることとした。

東京大学蔵模型と大久保寺神社蔵模型の比較については以下の通りである。

模型名称	特徴
①東京大学蔵模型	・1 重目の張出し（石落し状）を 4 面に備える ・屋根は桁行を入母屋、梁行を切妻とする ・全体的に屋根の降り棟の反りが深い
②大久保神社蔵模型 （東京国立博物館蔵）	・張出しが桁行・梁行各 1 面ずつ備える ・屋根は全て切妻 ・屋根は全体に直線的 ・二、三重目の平面規模が東大模型よりも小さい ・総高は東大模型より低い

基本資料にみる天守の法量と復興天守法量（出典：復興小田原城天守閣　－昭和の天守閣再建－）

	嘉永図	東大蔵模型	神社蔵模型	川辺図Ⅱ	**復興天守**
初重平面	17.728 21.664	18.04 22.00	18.04 22.04	17.40 21.26	18.72 22.72
二重平面	15.001 18.941	15.44 19.36	14.18 18.16	13.58 17.40	14.22 18.22
三重平面	12.425 16.365	11.82 15.78	10.30 14.20	9.80 13.58	10.0 14.0
天守櫓高	27.426	30.90	25.76	26.51	27.2
天守台高	10.940				11.5
総高	38.366				38.7

単位 1 間＝京間　6.5 尺　尺＝法定尺で換算

東大蔵・大久保神社蔵模型、川辺図は実測値による

③天守閣の計画案

第一案（昭和 33 年 10 月 9 日）

・一重は東大模型、二重三重は大久保神社模型とする
・基礎の安定のために地下室をつくる
・三重は展望台として設計し高欄をつける
・総経費 70,176,000 円

↓

第二案（11 月 6 日）

・大久保神社模型に基づき、屋根・破風などの一部を東大模型とする
・地質は堅いと思うので地下室は作らない
・総経費 64,718,000 円

↓

最終案（12 月 12 日）

・総体的な意匠構造は東大模型とする
・平面規模は大久保神社模型とする
・高さは東大模型及び大久保神社模型の中間的なものとする
・地下室を設ける
・４階の廻縁・高欄を設ける
（観光利用目的を加味し、4 階部分の廻縁・高欄は三重目に設置することとした。）

資料２－２

小田原城天守とその模型に就て

正員　藤岡通夫*

内容梗概

小田原城天守に就ては、既に3重天守模型が2基世に知られて居つたが、今回新たに舊藩主大久保家より5重天守模型を發見した。此等の模型が如何なる性質のものか、又實在した天守と如何なる關係にあるかを追究し、併せて舊作事方川部家に殘る古文書・古圖等を檢討し、模型の有する意義を略知り得た。その結果小田原城天守は寳永再興以前の形式は判然とせぬが、寳永再興のものは東京帝大模型と類似の形式を有し、其後天明・文化・文政と屢々の大修理にも拘らず當初の形式に變化はなかつたと推定し得る。尤も再策の計畫は度々あつた樣で、他の模型はその計畫案である。而して此等の天守及その計畫案は何れも江戸時代の典型的形式を有し、天守建築研究上貴重な資料として、その價値に論及した。

本研究は東照宮三百年祭記念祭會の援助による研究の一部である。此處に厚く感謝の意を表する次第である。

目　次

1. 緒　言
2. 天守の沿革
3. 天守模型の形式
4. 川部家古圖
5. 天守模型及古圖の年代
6. 天守の特徴
7. 結　論

1. 緒　言

小田原城の建築に關しては、既に田邊泰博士・巖谷不二雄氏が貴重な研究を發表せられ、現存の2個の天守模型に就て論及せられた。[1] その要點は兩氏の御研究によつて盡された觀もあるが、筆者もその天守模型を中心に研究を行ひたる處、諸種の新資料を求め得、聊か異る結論に達したので、此處に卑見を述べて、御指教を仰ぐ次第である。

2. 天守の沿革

城郭の沿革及規模に就ては既に述べられてゐるものがあるので省略し、此處には天守の沿革に就てのみ述べて置きたい。

小田原は古來大地震の多い所で、城郭も屢々地震によつて崩壞し、天守の再造修築も一再でない。天守の最初に建造された年代は不明であるが、北條氏時代天正年間の大修築前後に創建されたと推定されてゐる。即天正7年城の修理に着手し、修理用材として良材を山率行に課してゐるが(媒ケ谷村文書)、この頃城郭の建築は大いに整備されたと考へられてゐる。「明治小田原町誌」明治3年11月10日の項に

> 先ニ取崩許可ヲ得タル小田原城ノ天守及櫓等五棟ヲ九百兩ニ而賣渡ニ決定シ衆庶ノ纒覽ヲ許サル此ノ取毀ヲ寅見セシ古老ノ談ニヨレバ天守ノ屋上ヲ飾リタル鯱ハ銅製ニテ天正九年ノ在銘ナリト果シテ然レバ北條氏ノ遺物ナリシカ貫受書ヲ左ニ掲載ス

とあるのは恐らく事實を傳へるものと考へられ、天守は天正9年に完成したものかと考へる。北條氏滅んで大久保氏が城主に封ぜられたが、慶長19年所領を沒收せられ、城郭の外郭を破壞せしめられた。元和五年阿部氏が入城、更に寳永9年稻葉氏が是に替つたが、寳永10年1月20日關東大震災により小田原も大被害を受け、城郭は作事奉行酒井因幡守忠智、普請奉行黑川八左衞門盛至により公役を以て修理せしめられた(德川實紀)。天守の被害に就て徵すべき資料はないが、大被害を被つたであらうことは其後の地震被害によつて推定され、大修理を受けたものと考へられるが、元祿前の天守の規模を窺ふことにより再築されたとは思はれない。

第2回の災害は元祿16年11月22日に訪れた。その時の災害の狀況に就ては「大久保家記」「小田原文書」等諸書に記されてゐるが、「醍島伊信、同伊盛覺書」にも簡潔に記されてゐる。

> 一、同廿三日夜八ツ半頃小田原より梅原九郎左衞門參着小田原ニ而同刻戌敷大地震ニ而御本丸御天守二ノ御丸御屋形を初侍屋敷町家迄一宇も不殘悉ゆり潰其上所々之潰家より出火御天守を初御本丸御屋形迄不殘類燒……

即元祿の災害は震害に火災が加はり、全く跡形なくなつたのである。斯くて再營に着手し、御普請方惣奉行渡邊十郎左衞門、大久保右衞門兵衞、眞田大右衞門、下奉行小笠原大左衞門、中根彌五右衞門等が仕命せられ(醍島伊信、同伊盛覺書)、大工頭川邊普右衞門が工事を承はつた(川部家先祖書)。[2] 城の修覆には幕府より官金15,000兩を借用し(德川實紀、大久保家記)、天守は石垣臺より徹底的に築直された。大正12年の關東大震災により崩壞した石垣中より、次記の如き修理銘が發見された。

> 元祿十六年癸未年十一月二十二日夜地震天守城樓悉祿翌年春再興之事寳永二乙酉年四月日天守城樓以下迄外郭惣石壘築成矣於是彫攻于壘石以誌焉
>
> 從四位相州小田原城主兼豫州守藤原朝臣大久保氏長忠增再營

かくて寳永2年4月27日再造開始し、翌3年6月18日天守築造は竣功した。[3] 即「山田日記」[4] 同日の項に

> 一、十八日御天守就御成就爲拜觀家中不殘小兒懸居迄麻上下御用所江遂出席也

一、……十八日巳刻摩利支天外六躰之御佛像御天守江御遷座蓮上院主漸坊導師

とあることにより知られ、引續き天守最上重へ佛像が祀られた。

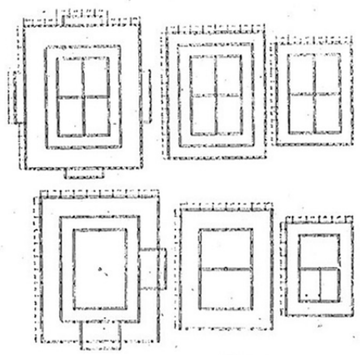
其後天明2年に至り再び大地震に災された。地震は2日に亙つて續き、櫓を始め諸所の破壞を告げてゐる(德川實紀、大久保家記)。この修理に際しては官金5,000兩を借りて居り(大久保家記)、川部匠太氏藏の「天明五乙巳年御天守小天守御普請中控帳」(以下天守普請中控帳と略稱す)は普請に用した材料入費を詳細に記してゐるが、その內容より見ると後記する如くに再築ではなく、地震により傾斜した天守を引起し、屋根材其他を補給して組直したのである。

以後「川部家先祖書」によると文化元年10月24日に天守、文化10年12月15日に附天守の普請に勤仕したことにより酒代を頂戴して居り、修理のあつた事を示してゐる。又文政4年10月4日に天守修覆に依つて酒代を頂戴したる記載あり、川部家には同年8月上棟の棟札寫を殘してゐるが、今回の工事も「川部家先祖書」に修覆の字を用ひて居り、後記する如き前後の事情より、矢張り修築の範圍を出でなかつたと思はれる。

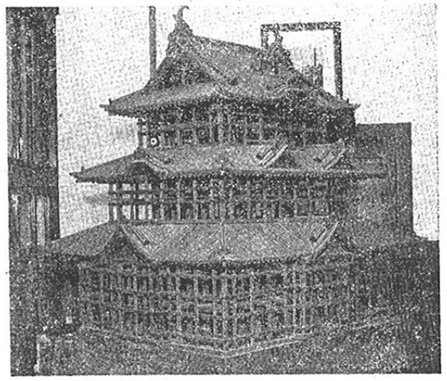
其後天保4年に大手渡櫓、同6年に三の丸御櫓、同11年に御既曲輪御櫓、天保14年に御城廻り御屋形向、嘉永2年に南曲輪酉之方御櫓と度々城郭修理が行はれたが(川部家先祖書)、嘉永6年2月2日に又激震があつて、天守門櫓等が大分傾斜し、4月17日官金10,000兩を借りて修理し、萬延元年に附天守の修覆により酒代を頂戴してゐるが(川部家先祖書)、この前後に天守の修覆が行はれたか否かに就ては記錄なく疑問である。寧ろ後記する如く修理の計畫だけに終つたのでないかと考へる。かくて明治3年11月10日天守及櫓等5棟を900兩にて賣渡すことが決定し、取毀しが行はれたのである(明治小田原町誌)。

3. 天守模型の形式

小田原城天守模型は既に田邊博士等の紹介された3層天守模型2基の他に、5層天守模型が1基存する。これ等天守模型は外部の意匠及平面に若干の差が認められるが、何れも江戸時代天守樣式を窺ふ上に好個の資料であると認められるので、その形式に就て說明を加へて置きたい。



第1圖　3重天守模型平面
(上東京帝大　下小田原市)



第2圖　小田原市藏3重天守模型

a) 小田原市藏3層天守模型(第2圖)

外觀は3層で、初層は上下2重に分れてゐるが、最下重の高さは低く、後記する理由によつて穴藏の性質を有してゐたものと考へられる。從つて初重は中2階の如き位置にある。初重は桁行3.575尺、梁行2.925尺、11間9間に分たる。20分の1縮尺であり、等柱間であるから、全部6.5尺間を用ひたこととなる。但し4隅には半間の小柱間を用ひてゐるので、各面の中央に柱が存する。長短各1面宛巾3間、奥行3.5尺の出張りを中央に付す。內部は周圍に巾1.5間及1間の2重の武者走を繞らし、その中に田字形平面を有し、中央に大黑柱を立ててある。而してこの田字形平面は6間4間であるに拘らず、柱は4隅と中央にしか存在せぬことは、實在したものとしてはなかり無理な構造である。2重は桁行2.925尺、梁行2.275尺、9間7間に分たる。周圍1.5間を武者走とし、中を3間4間の2室に分つてゐる。中央の大黑柱及田字形各交點の柱を通柱としてゐる。3重は2.275尺、1.625尺で7間5間に分たる。周圍に巾1間の武者走を繞らし、その中は複雜な平面を有してゐる。即中央に8角の大黑柱を立てゝ左右を2.5間3間の2室に分ち、その一方は半分を1段高い床として上段の如くしてゐる。その狀恰かも現存の備後福山城天守や江戸城天守の最上重に類似してゐるが、これ等兩天守が最上重に祭神を祀つてあつたと同樣に、本天守も既記の如く摩利支天等を安置してあつたので、その設備であると考へられる。猶上段と相對して巾半間の部分を區切り、2本の細い柱を立てゝゐるのは、その意圖が不明である。

外容を觀るに總高さ4.25尺、初層屋根は寄棟で2方に切妻破風を見せ、虹梁を1本宛用ひてゐる。切妻破風の大棟は略水平で、2層目の窓下に納つてゐる。2層目も寄棟とし、梁行中央に唐破風を設け、桁行には2個宛の千鳥破風を配してゐる。3層目は入母屋で、桁行に軒唐破風を設けて居り、2・3層破風の棟は上方に至るに從ひ勾配が急となつてゐる。屋根及軒の反りは比較的少く、各層隅棟は直線的である。

本模型は外壁がないので外觀を充分に窺へないが、最近本模型の外觀を示したと思はれる古圖が2葉發見せられた。2圖共圖柄は同一で、屋根形式は本模型と寸分違はない。1圖は大で1圖は小であるが、小圖には田中正吉の銘がある。所藏者中野敬次郎氏の談によると、同人は文久年間の頃梁香川文造高之の弟子で、大なる圖は香川家に殘る御殿繪圖の筆跡と同一である所

---

* 東京工業大學助教授

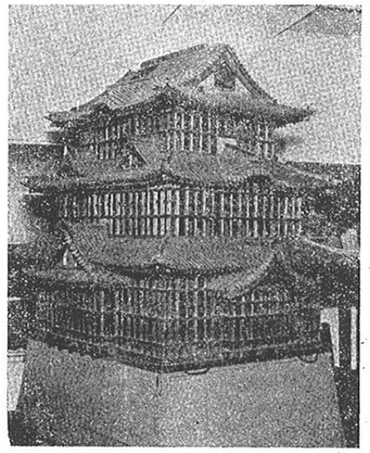
1) 田邊泰博士・巖谷不二雄氏:「相模國小田原城に就て」建築知識、昭和11年7月

2) 川邊普右衞門の後裔は川部匠太氏が當主であるが、同家にある先祖書により得裔なること確かである。先祖書は五代丈右衞門、六代匠作、七代普之助の3代のものが存する。

3) 田邊博士等は天守竣功を寳永2年4月と見て居られるが、この時完成したのは石垣臺のみである。

4) 大久保家藏筆寫本、小田原藩の諸事を詳細に記せど筆者は不明

より香川文造の直筆になると思はれ、之を田中玉吉が何等かの機會に借りて寫し、その儘田中家に殘つてゐたものであるといふ。尙田中家の口傳によれば、本模型も香川文造の製作になるといふが、果して然らば文久年間の作となる。是に關しては後に卑見を述べることゝするが、同圖により窓の配置や附櫓の樣子も知れるのである。即外壁は總塗籠で、窓の上に長押を繞らして居り、初層の穴藏に相當する部分には單に鐵砲狭間を設けてあるのみで窓はない。

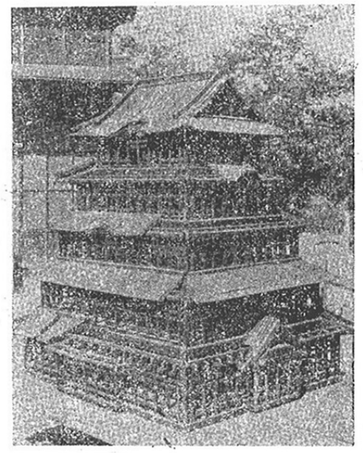


第3圖　東京帝大藏3重天守模型

b)　東京帝大模型（第3圖）

本模型は前者より一段と精密に造られて居り、間仕切建具等は存在しないが、外壁を2面に設けてあるので開口部を知り得る。全くの3層3重で內外が一致し、初重の床も石垣上直ちに設けられてゐる。初重平面は小田原市模型と同じく桁行3.575尺、梁行2.925尺で、11間9間に分たれてゐるも、柱間は等しくない。即桁行は中央6間、梁行は中央4間が6.5尺で、その兩側2間宛が6尺間となり、4隅は4.5尺宛の小柱間となつてゐる。從つて總體に於て小田原市のものと等しい。又4面共に中央に出張りがあり、その巾が桁行は4間、梁行は3間となつてゐる點も小田原市模型と異る。內部は周圍に巾10.5尺と6尺の2重の武者走を繞らし、その中に田字形平面を有する點小田原市模型と同樣であるが、田字形には1間毎に柱が配置されてゐる。2重は桁行3.15尺、梁行2.5尺で10間8間に分たれて居り、中央部は6.5尺間、兩端の2間は6尺間である。6尺巾の2重の武者走を繞らし、內部に田字形平面を有する點小田原市模型と著しく趣を異にしてゐる。3重は桁行2.55尺、梁行1.9尺で、兩端の1間のみが6尺間、他は6.5尺間である。周圍に巾6尺の武者走を繞らし、內部に田字形の4室を有するが、上段の設けの如きがない。初重より3重迄の柱眞は、全部上下に貫通してゐる。

外容は小田原市模型と若干の差異を示す。全高は5.1尺で前者よりかなり高い。初層は寄棟で梁行には中央出張りに切妻破風をかけ、桁行中央出張りには入母屋破風を設けてゐる。切妻破風には2重虹梁を設けて上下3個の蟇股を配し、裝飾的手法が多い。出張りの出桁は小田原市模型より著しく大きい。2層は寄棟の梁行に軒唐破風、桁行に2個宛の千鳥破風を配してゐることは同樣であるが、千鳥破風の位置が稍々高く、その棟も軒唐破風の棟も3層の窓下に納らず、窓中間の壁面に突當つてゐる。3層目は入母屋々根で、桁行中央に軒唐破風を設けてゐる點小田原市模型と同樣であるが、3層を通じて軒及隅棟の反りが著しく強くなつてゐる。外壁は總塗籠で、窓の上下と軒下に長押を繞してゐる。



第4圖　大久保家藏5重天守模型

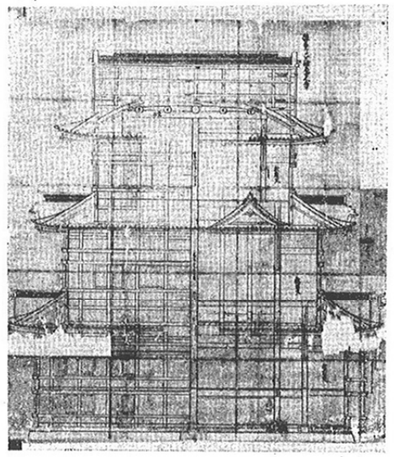
c)　大久保家模型（第4圖）

本模型は永年大久保家の物置に放置せられて存在も知られず、損傷も甚しいが、前2者と異り5層5重の天守模型である。1間の寸尺より40分の1の縮尺に造られたものたることを知る。初重平面は桁行2.6尺、梁行2.275尺で17間15間に分たる。柱間は桁行中央4間が6.5尺、兩端を半間卽3尺宛とし、他は6尺間となり、梁行は中央2間を6.5尺、兩端を半間卽3尺宛とし、他は6尺間である。梁行には兩側中央に4間宛の張出しを設け、桁行は1方にのみ中央に6間の張出しがある。內部平面は複雜で中央に田字形に柱を配し、1.5間・2間・2間の3重の武者走を繞した如き形であるが、長押は全然用ひられて居ない。2重目は桁行2.3尺、梁行1.975尺で、15間13間に分たれてゐる。中央部の6.5尺間、兩端の3尺間なること初重と等しい。中央田字形の平面の外に1.5間・2間・1間の3重の武者走を繞らした如くに柱を配置す。3重目は桁行2尺、梁行1.675尺で、13間11間に分たれる。中央の田字形平面の外に1.5間及2間の武者走を配した如き形であるが、柱の配置に上下と異る稍不整なる點を見出す。4重目は桁行1.7尺、梁行1.375尺で、11間9間に分たる。田字形平面の周圍に1.5間及1間の武者走を配した如き形である。五重目は桁行1.4尺、梁行1.075尺で、9間7間に分たる。中央田字形平面の周圍に1.5間の武者走を配した形であるが、田字形の半分は床を高くし、その1部には壁を設けて上段としてある點、福山城天守5重目と類似の手法を持つて居り、祭神を祀る爲の設備と解される。以上を通觀するに、中央の田字形は初重より5重迄柱眞が通り、殊に中央には大黑柱の設けがあるが、周圍武者走は何れも柱眞をづらして上下に通るものがないのは、構造上著しい特色である。而して初重17間15間の規模は、柱間に差こそあるが、德川氏の築いた大坂城天守にも匹敵する、極めて宏壯雄大なものである。

次に外容を觀るに總高さ3.3尺で、屋根の破損は著しいが、略その全形を窺ひ得る。初層より4層迄屋根は寄棟とし、4方に種々の破風を配して複雜なること他に類を見ぬ程である。即初層は梁行中央の張出しに大きな切妻破風をかけ、桁行中央の張出しに入母屋破風をかけてゐた點は帝大模型と同樣であるが、入母屋破風の兩側に更に小千鳥破風を1個宛配してゐる。2層目は桁行に大小3個、梁行に2個の千鳥破風を配し、3層目は桁行中央に軒唐破風、梁行に2個の千鳥破風を設けてゐる。4層目は桁行の屋根が全く破損してゐるが、恐らく2個の千鳥破風を配してあつたと思はれ、梁行には中央に軒唐破風を置き、5層目は入母屋の桁行中央に軒唐破風を設けてゐる。各層の軒の反りは比較的少いが、順次に1間毎に遞減する屋根は直線的に規則正しく上方へ漸減してゐる。外壁は全然造られて居らぬが、初層梁行の切妻破風には雄大な2重虹梁を架してある。

4.　川部家古圖

小田原藩作事方川部氏の後裔川部匠太氏方には、諸種の資料を存してゐるが、その中に天守設計圖も數葉あり、前記模型と對比し、その年代を考ふるにも役立つので、說明を加へて置きたい。

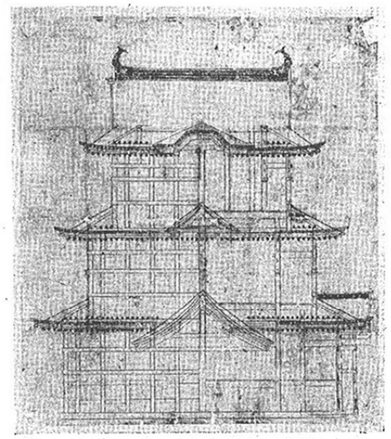


第5圖　川部家藏3重天守圖

a)　3重天守圖（第5圖）

縮尺20分の1の圖で平を表し、その柱や破風の配置より見て、小田原市模型と同一物の圖たる事が認められるが、總高さは稍高く4.37尺となつてゐる。最も詳細に畫かれた圖で、模型の不備なる點を補つて、その構造を一層明瞭に知り得る。

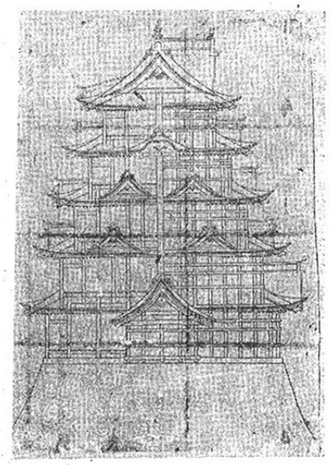
床及天井は朱線を以つて畫いてあるが、最も下の床には「下板敷」、その上方のものに「二階板敷」、その上方を「二重目二階板敷」、最上重を「三重目二階板敷」と記してある。これは本天守が明かに3層3重なりし事を示し、最下重は床下乃至半地階の性質を有してゐた事を明示するのである。又初重・2重・3重共天井を有して居り、各重共武者走と身舍の廻に小壁を設け、長押・敷鴨居を取付け2本溝の建具を用ひてゐたが、半地階と見られる最下重には、長押・建具等はない。中央の大黑柱は3重目床下で纏ぎ、これより下迄は1.8尺角、それより上を將軍柱と稱して1.5尺角の8角形となつてゐる。



第6圖　川部家藏3重天守圖

b)　3重天守圖（1組）（第6圖）

縮尺40分の1の圖で、天守の妻及平を表はし、2枚1組をなしてゐる。その規模は小田原市模型と同一で、本項a)圖の2分の1となつてゐるが、破風の配置に差を認め得る。即妻の方の初層の屋根に2個の千鳥破風を配してゐる點、平の2層目に1個の千鳥破風を配してゐる點が、前記模型及圖と異つてゐる。又初層平の中央張出しが巾4間となつてゐる爲、その切妻破風も小田原市模型より著しく大きくなつてゐる。妻の中央張出しは背面のない方を表してゐる爲不明瞭であるが、平の圖に畫かれた側面より察して、矢張り4間であつたと見られる。

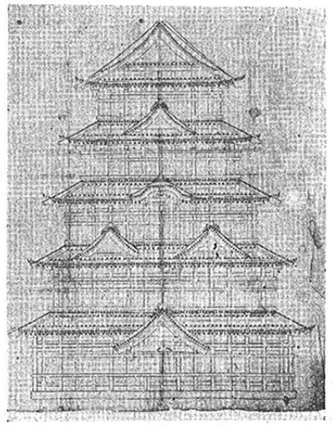


第7圖　川部家藏5重天守圖

c)　5重天守圖（第7圖）

縮尺40分の1の圖で妻を表はし、その柱や破風の配置は大

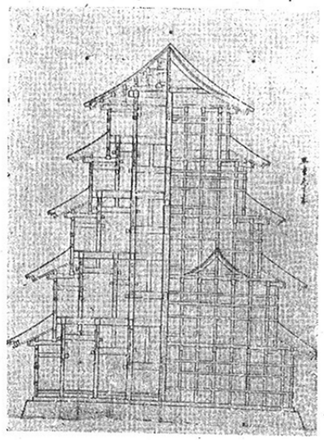
久保家5重天守模型と一致してゐるが、總高さは 3.3尺となつてゐる。初重張出しの破風構造の如きも全く一致して居り、大久保家模型が破損甚しき爲、破風の外觀を窺ふ上に有力な資料である。



第8圖　川部家藏5重天守圖

d)　5重天守圖（第8圖）

縮尺40分の1で妻を表はし、その規模は前記 c) 圖と全く同じであるが、唯異るところは4層目の軒唐破風を廢して千鳥破風とし、3層目の2個の千鳥破風の代りに中央に軒唐破風を設けてゐる點にある。 c) 圖の如く半分を斷面にせず、全部軸部の柱・長押・貫等を表はしてゐる。縮法は c) 圖の如く巧みでなく、懸魚も省略してある。



第9圖　川部家藏5重天守圖

e)　5重天守圖（第9圖）

縮尺30分の1の大なる圖で妻を表はし、總高さ 4.45尺で、大久保家模型及 c) d) 圖と同一形式の5重天守を寫したものである。左半は軸部の構造を示し、左半は純然たる構造斷面を示し、この種の古圖としては珍らしきものである。破風は2層の右半に千鳥破風が1個畫かれてゐるのみであるから、之より d) 圖の形式でないとは云へない。 左半構造斷面は著しく巧妙で、精密に構造を考慮して寫してゐる。5重には天井を設け、長押・數鴨居・建具等を設けてゐるが、4重目以下に住居的要素はない。大黒柱は下方3重を通し、4重目床下にて繼いである。

5.　天守模型及古圖の年代

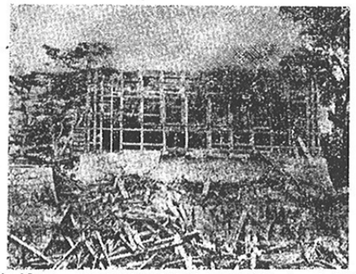
上記の諸天守模型及諸天守古圖が何時の年代の天守を示すか、又果して實在したものなりや否やを判斷することは、數が多いだけに困難を感ずるが、次に聊か卑見を述べて置きたい。

先づ明治取毀しの際の天守は如何なる形式のものであつたかといふと、幸にして取毀工事中の寫眞によつて推定し得るが、その形式は帝大模型と略一致したものであつたが、若干異る點もあつた。[5] その理由は次の如くで、帝大模型と一致する點は

i)　桁行中央の張出しが4間なること

ii)　初重の柱間を見るに、中央6間がその兩側の2間より稍廣く、兩端の半間は中央の柱間の半分より大なること、その比例を換算すると、帝大模型の柱間の關係と一致すること

iii)　中央4間の張出しの上部に軒桁狀の横架材が見られ、且その右端には隅木の存在が見られる。之は張出しの屋根が切妻ではなく入母屋であつて證據で、帝大模型と一致する。



第10圖　小田原城天守明治初年取毀し中の古寫眞

iv)　4隅の 4.5尺間と推定し得る柱間の間に、柱と同じ太さの間柱を入れてあること

又帝大模型と一致せざる點は次の如くである。

i)　初層の柱を結ぶ貫が上下4本通る點は帝大模型の3本と異り、小田原市模型と酷似せること

ii)　下より2本目及3本目の貫の間に稍太い横架材が見えるのは、即此處に床の存在を示すものであり、この點小田原市模型と軌を一にすること

iii)　柱の間に間柱の存在が見えぬこと

以上の諸點より觀察するならば、明治初年取毀しになつた天守は帝大模型と酷似するものであつたが、初層内部は小田原市模型の如く下部に地階を設けてゐたことを知る。而してこの取毀しの天守が果して何時の普請のものであるか、帝大模型を寶永造營の實施案と認めてよいかには、尚多くの問題を殘してゐる。それには當然寶永・天明・文政等度々の普請の内容に就て觸れ

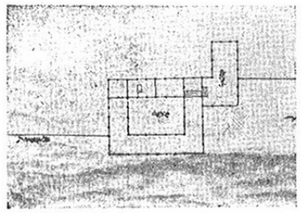
5)　田邊博士等も取毀しの際の寫眞に見ゆる長手中央部に4間の出張りの存する事等より、帝大模型が寶永造營の際の實施案で、小田原市模型はその際の計畫案なる見解をとられた。

ねばならぬ。

先づ寶永普請は既記の如く元祿地震後燒失したこゝ、不直接より築直したものであることにより、全くの再築であつた事を知るが、元祿前の天守の形式は「小田原資料覺書」[6] に

御天主、上段四間に六間、二段三段八間十間、穴藏、四段目拾間拾式間

とあることにより若干知られるが、それは層重の一致したものでないことが容易に推定出來る。又小田原城本丸を記した古圖に天守の平面を記したものがあるが（第11圖）、同平面は既記天守模型と全く系統を異にする古風なもので、間數が上記覺書記載と一致せぬが、元祿以前の天守が後世のものと著しく異るものであつたことの一證にはなり得るであらう。



第11圖　天守平面古圖
（御本丸繪圖の一部）

次に天明の普請であるが、これは既記の「普請控帳」によつてその工事の内容を詳細に知り得る。天明普請は天明2年の地震による破壞の修理であるが、今回は元祿の時の樣に類燒はして居らず、天守は傾斜しただけであつた。即同書に工事に要した種々の材料が見積られてゐるが、その一項に

右は御天守北東ニ曲ミ候ニ付西南へ起方御入用御手前積リ如斯ニ御座候、

とあるのはその被害狀況を知るものである。又その當初に

右は御天守小天守惣御修復減少仕候木拵如斯ニ御座候[7]

と記し、諸種の材料が擧げられてゐるが、これは使用に耐へぬ材料を補給したことを示してゐる。その補給された材料は棟木・隅木・垂木・桁等の屋根材が主で、柱其他の軸部材は全く擧げられて居らぬ。これによつて天明普請は全くの修覆で、傾斜した天守を引起し、屋根材その他の小材を取替へ、壁を塗替へ、瓦を葺替へた程度の工事で、天守の形式には殆んど變化はなかつたことを推定し得るのである。

其後文化元年と文政4年に普請があつたが、これ等の工事に就ては詳らかにし得る資料がない。然し火災其他による徹底的な破滅がなく、しかも城郭禁令の嚴しい時代に江戸の近くに於て、財政的にも豐かでなく常に幕府より借金をしてゐた大久保家が、天守の再築を行つたとは考へ得られないのであつて、この普請と稱する工事も、矢張り修覆であつたと考へ得るのである。斯く考へ來る時、明治初年取毀しの時の天守は、度々の修理に拘らず寶永造營の形式が殘つてゐたと考へるのが至當で、從つて帝大模型が寶永造營の實施案とする說は略正しい事となる。而して川部家に殘る古圖の中帝大模型と同形式の設計圖を求め得ぬ事は、結局この形式が比較的早く出來たものであることの傍證にもなる。但し取毀しの際のものと模型に見る若干の差は、寶永造營の當初よりあつたか、或は天明・文化・文政の修理によつて生じたかは、斷定を下すべき資料がない。

次に小田原市模型は既記の如く口傳には文久の作といふが、果して事實であらうか。この模型と同形式の設計圖は川部家の a) 圖である。それには畫かれた年代も記されて居らぬが、圖の周圍に記された文字の手跡と、川部家各代の先祖書の手跡を比較することにより、同圖は天明4年に出生した川部丈右衛門の手跡なりと認定し得る。しからばこの圖は文政の修覆に先立つて計畫されたものであらうが、諸種の都合によつて再築が不可能であつた爲に、單に計畫案だけに終つたものかと考へる。而して小田原市模型も亦文政の作かといふと必しもそうでない。即川部家に殘る文書の中に次の一札がある。

覺

一天守木形之儀ニ付當秋山城と申易著日ニ頼木形吉左右見候處ニ易表ニ今年ハ悪舗く御座候來酉年正二三之比至極之吉左右拜見仕申候其外私一生之儀易表ニ無相違當リ申候依之ニ右山城易表之通木形成就任仕る樣ニ奉願上ゲ候

申ノ十二月吉日

この覺の筆者が誰であるか、又この木形が何れを指すかに就ては明示されて居らぬが、地震による破損後再築計畫のあつた時のものであることは疑ひない。しかし天明・文化・文政の修理直前には申年なく、寶永2年と萬延元年とが申年の候補と考へられる。しかし既記の如く寶永2年12月は既に天守再築工事が進行中であつたので、今更木形の必要もなく、又元祿寶永へかけての記錄が川部家にないことを考へれば、寶永2年のものとなし得ない。而して覺の手蹟は弘化4年出生の川部晉之助の記した先祖書と似て居り、しかもその手跡が稍美しからざるは14歳の晉之助として適當であらうかと考へられる點より、萬延元年の覺と見るのが妥當である。しからばこの木形は安政大地震後に再築を計畫して造られたもので、香川文造作とする口傳と年代も完全に一致する點より、小田原市模型を指すものと考へられる。而してこの木形は川部家に殘る文政の計畫圖が參考とせられた爲に、その形式も兩者が合致したものでないかと考へる。しかしこの計畫も既に幕末の國内不穩の時に當つてゐた爲、遂に實現もせられず、破損の儘維新となり取毀しの運命に至つたものであらう。

最後に5重天守模型及他の古圖に就ては、推定に資すべき有力な資料が何物もない。 古圖の手蹟も前記 a) 圖と異り、1・2示された字も未熟にして「川部家先祖書」に該當するもののないのは弟子の畫いたものかと考へる。從つて度々の修築に際して5重の計畫も行つたものと思はれるが、當時既に5重天守は許可されないところより、計畫だけに終つたかと思はれる。その時期は不明であるが、大久保家模型は或は天明修築の際に造られたものではなからうか。

6.　天守の特徴

上記の3基の天守模型及諸古圖は、その手法に若干の差があるが、共に江戸時代天守の特徴を具へて居り、遺構のない今日頗る重視すべき遺物といはねばならない。今これ等を一括して樣式上の特徴とその價値に就て論じて置きたい。

3重天守模型は3層で初重は同大であるが、その桁行 71.5尺、梁行 58.5尺は、3重天守としては規模極めて大である。即その大さは梁行は廣島城天守と同大で、型行は1間短く、松本城天守よりは梁行・桁行共に大きく、萩城天守より稍小さい

6)　註1) 記載されたものによる。

事となる。斯く3重天守であり乍ら5重天守に匹敵する規模を有する爲、形態を整へるのに次の如き工夫が巡らされてゐる。

i. 軸部の高さが非常に大きいこと、特に帝大模型に於ては上方邊減が少いので、この傾向が著しい。この結果階高が著しく高くなり、床下を高くして半穴藏の性質を具備せしめるに至つたものと思はれる。

ii. 軸部が高い結果、それと調和せしめる爲軒の出が著しく深い。これは建物の規模の大小に拘らず、建物各部の寸法の比が定められた江戸時代の木割の發達した時代の特色を具へるものととして興味がある。

小田原市模型及實在した天守は、初層が2重に別れ、下方は床下乃至半地階の性質を有してゐたことは既に述べた。惟ふに天守穴藏は暗黒の不便さから次第に採光を欲する樣になつたが、熊本城天守に見る手法は恐らくその最古のものであらう。[7] 下つて松江城及名古屋城天守に於ては石垣の1部に窓を取り、石垣を削つて内部の採光をとつて居り、更に下つて福山城天守に於ては穴藏が半分石垣上に出で、半地階の形式をとり、壁には窓をとるに至つた。[8] これと似た手法は江戸城天守の再營計畫にも考へられたと思はれ、[9] 江戸時代に於ては實用上穴藏に窓をとるものが多かつた。而してその極端になつたものが本天守に見るもので、穴藏は石垣上に出でゝ、穴藏本來の形式を失ふに至つたと解するのが妥當であらう。尤もこれは天守の規模が影響した事は上記の通りである。

初層の破風は各模型の間に差を有するが、共に軒を突破つて切妻破風と入母屋破風が雜置されてゐる。この種の切妻破風の現存するものとしては弘前城天守があるが、猶元和再造の岡崎城天守の初層にも見られ、[10] 江戸時代に好んで用ひられた手法である。又入母屋破風を有する張出しは、天守初層としては珍らしい。上層にあるものとしては岡山・松江・萩・若松・和歌山等少くなく、その古きものは軒がその層の梁行の方に迄延廻して發生の意義を知り得るが、次第に形式化して破風も小さくなり、單なる裝飾的手法に化してゐる。本天守及帝大模型に於けるものの如き、その裝飾化した典型的なものと云ひ得よう。

同樣の事は千鳥破風に就ても云へるのであつて、この種破風が本來の入母屋破風を脱し、構造的意義を失つて裝飾的に取扱はれるに至つても、猶その破風には軍備的裝置があつて實用的であつた。然るに福山城に於ては破風内には僅に人1人が坐れる程度の餘地しかなく、狭間も1個宛となり、武者走と破風下の境に引戸を設ける等、破風内は著しく窮屈になつてゐる。この傾向は時代の降ると共に愈々著しく、宇和島城天守に於て千鳥破風は全然中に入れぬ單なる裝飾物と化したのである。本天守に於ける千鳥破風も宇和島天守に於けるものと軌を一にするものであつて、平和な江戸時代を反映した手法と考へる。窓の上下に繞した長押も、宇和島・弘前兩天守と共に、江戸時代の虚飾化した天守に相應しい手法で、又よく時代の風潮を表したものである。

猶本天守には最上重に摩利支天外を祀つてあつたが、實施案に近いと思はれる帝大模型には反つてそれがない。然るに第1古圖に示す本丸古圖の天守平面には最上重の上段が、小田原市模型と同樣に記されてゐる。この平面は初重・2重・3重を重ねて畫いたもので、柱の配置も極めて雜駁なものであるが、本丸御殿の存せぬ點より江戸末期の本丸を畫いたものたるは確かで、實在した天守の平面は帝大模型と全く同じでなかつたことを知るのである。兎に角天守最上重にかかる施設のあることも、江戸時代天守に多く見るところである。

7. 結　　論

小田原城天守は建物は現存して居らないが、模型を多數殘してゐる點によつて、既に知られてゐた。今この模型を中心に研究したところ、次の結果を得た。

i. 寶永に再築された天守は、天明・文化・文政と屢々修理を受けたが、原形を損ずることなく明治維新に至つたと考へられる。その形式は東京帝大模型と酷似するもので、從つて同模型を寶永再築のものとすることは正しいが、實施されたものは多少違つてゐた樣で、殊に3重目には摩利支天等を祀る上段の設けがあつた。

ii. 小田原市模型は寶永のものでなく、口傳に殘る文久の作とする說が、他の資料より見て正しい。しかしこの形式は既に文政修築の時に再築計畫として出來てゐたと考へられる。何れも再築の計畫に終つて實現されなかつた。

iii. 大久保家模型は年代は判然とせぬが、矢張り修理の際にたてられた再築計畫と考へられるが、當時5重天守の築造を許されなかつたので、固より實施はされなかつた。

iv. 天守模型及天守古圖は、何れも江戸時代天守の特色を具へて居り、寶永再築に當つて從來のものと異る全くの新樣式を以て計畫せられたものと考へる。從つて遺構が實在して居なくても、天守閣建築の研究上貴重なる資料となり得る。

猶寶永再造の天守が屢々の震害により破損を受け乍ら明治維新迄その原形を止めてゐたのは、一には大久保家の財政にもよるが、一には江戸に近い爲幕府の目を恐れて修理に名をかりて改築をすることの出來ぬ事情もあつたかと思はれる。又その平面の規模が5層天守として充分なる大いさを有するに拘らず遂に3層に終始したことと、5層天守の計畫が多數に殘つてゐることは、當時5層天守の築造が許可されて居らなかつたことの一證據で、城郭禁令後の風潮を知る好資料であることを知る。尙3層なるも、かゝる大規模の天守の再築・修理並びに城郭の修補に官金が度々貸與せられたのは、箱根を目前に控へて江戸防衛の前進基地をなす小田原であつたが爲に、幕府は積極的な援助を敢へてしたのであらう。

終りに調査に種々便宜を與へられた大久保家、川部匠太氏、小田原圖書館、中野敬次郎氏の御厚情に謹んで感謝の意を表する。

7) 拙稿：「熊本城天守復原考」建築學會論文集 22.號
8) 拙稿：「天守閣建築概說」(4) 畫說、昭和 13 年 9 月
9) 拙稿：「一古圖による江戸城天守私見」畫說、昭和 16 年 1, 2 日
10) 拙稿：「三州岡崎城天守に就て」建築學會論文集 27 號

『建築学会論文集（２７）』，社団法人 日本建築学会，P. 8-14，1942

〔研究ノート〕

小田原城天守の模型

建築の設計が平面図・立面図などの図面で行なわれることはよく知られていよう。また、大きな建物や構造の複雑な建物の設計では、模型を作って検討することがあるのも、これまたよく知られているとおりである。

建築模型の歴史は古い。遠く六世紀後半の崇峻元年(五八八)、飛鳥寺造営のため百済から僧侶とともに寺工・瓦工・露盤工などが渡来した際、金堂の「本様」がもたらされたといわれており、この「本様」は模型のことと考えられている。当時の日本には仏寺建築に関する知識は当然のことながらまだなかったわけで、渡来して来た技術者たちが日本の工匠を指揮して造営に従事したものと考えられる。その際、これから作ろうとする建物の姿を、この模型で日本人工匠に説明したのであろう。

ところで、城の天守は、規模が大であるのみならず構造も複雑であって、そのため図面だけでなく模型を作って検討することが多かったのではないかと推測される。そして事実、そのような意味で作られたとみられる天守模型がいくつか現存している。小田原城天守の模型は、そのもっともよく知られている例である。

小田原城天守模型は、現在までに四例が知られている。最初、田辺泰・厳谷不二雄両氏によってこのうちの二例が紹介され（『建築知識』昭和十一年七月号）、その後、藤岡通夫氏によってさらに二例が紹介された（「小田原城天守とその模型について」『日本建築学会論文集』二七号　昭和十七年十一月、後に一部書き改めて『近世建築史論集』中央公論美術出版　昭和四十四年に収録）。以下、藤岡氏の論文を参照しながら、模型を紹介しよう。

小田原城天守閣所蔵の模型

(1)小田原市所有の模型

もと東京大学所蔵。小田原市の古道具屋にあったものを東京大学が購入し、昭和三十七年、小田原城天守閣博物館完成を機会に小田原市に寄贈された。三重天守模型で、縮尺は二〇分の一。元禄十六年(一七〇三)十一月二十二日の大地震によって崩壊・焼失した後、天守は、宝永二年(一七〇五)に再建されたが、この模型はその再建用のものと考えられる。ただし実際に宝永二年に再建された天守は、一重目が二階にわかれていたことなど、この模型とはやや違う姿だったようである。

(2)大久保神社所有の模型

三重天守模型で、縮尺は二〇分の一。香川文造による文久年間(一八六一―六四)の製作と伝えられる。明治三年(一八七〇)に取り壊した時の姿は、この模型に近いものであったと考えられている。

(3)東京国立博物館所有の模型

三重天守模型で、縮尺は二〇分の一。大久保神社所有のものと大きさも形式も同じである。

(4)旧大久保家に所有されていた模型

五重天守模型で、縮尺は四〇分の一。再建計画用に作られたものと思われるが、五重天守築造は許されなかった。

以上四例のうち、(1)(2)は神奈川県の重要文化財に指定され、小田原城天守閣に展示されている。また、(4)の旧大久保家所有のものは、先掲の昭和十七年の藤岡論文に紹介されているが、現存しない。

これらの模型をみると、模型とはいえ、柱・梁・棰などが忠実に作られており、素人細工ではないことがわかる。実際の建物を建てるための検討用のものであるだけに、それぞれ天守自体は現在に伝わらなくても、江戸時代のおよその姿をこの模型によって知ることができるのであって、貴重なものといわねばならない。

（西和夫・神奈川大学教授）

『日本の城郭体系　第６巻』，株式会社　創史社，P. 469，1980. 2